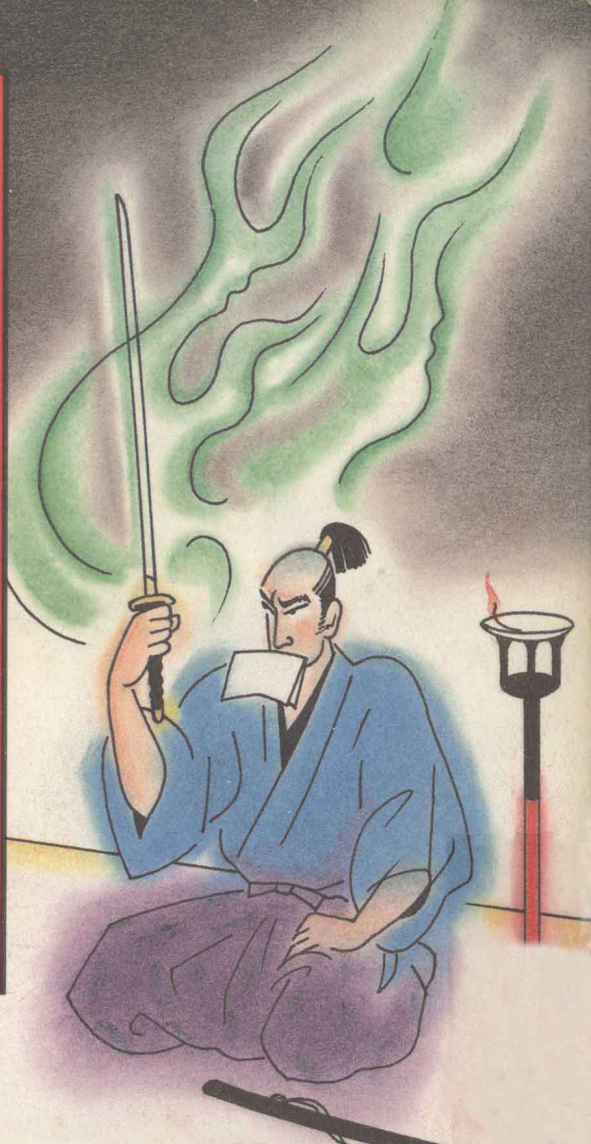


日本劍客伝・二

塚原卜伝・南條範夫
上泉伊勢守・池波正太郎



南條範夫（なんじょう のりお）

1908（明治41）年、東京生まれ。

池波正太郎（いけなみ しょうたろう）

1923（大正12）年、東京生まれ。

日本剣客伝 1 塚原卜伝・上泉伊勢守

昭和57年2月20日 第1刷発行

定価 320 円

著 者 南條範夫・池波正太郎

発行者 初山有恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集—図書編集室 販売—出版販売部

振替 東京 0-1730

© NORIO NANJO & SHOTARO IKENAMI 1982
Printed in Japan 0193-260861-0042

日本劍客伝 1

塚原卜伝 上泉伊勢守

南條範夫 池波正太郎

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 鑛治

目次

塚原卜伝 南條範夫

鹿島七流 9

神前試合 21

その面影 34

敵の兜の八幡座 47

鹿島動乱 72

無敵と孤独 84

卜伝神話 97

上泉伊勢守 池波正太郎

箕輪の姫 111

襲撃 122

戦乱 134

上州一本槍 145

国峰の城 158

落城 171

柳生の里 183

瀬田の白雨 195

日本の剣客十傑を選ぶ(座談会)

209

稲垣 史生

尾崎 秀樹

藤島 一虎

武蔵野次郎

綿谷 雪

(五十音順)

日本劍客伝
1

塚原卜伝つかはらぼくでん

南條範夫

『週刊朝日』昭和四十二年三月三日号～四月二十一日号掲載

鹿島七流

一

坂東の鬼と謳われた佐竹義重が、江戸重通の本拠水戸城を陥れた余勢を駆って、府中城（石岡）の大掾清幹を襲ったのは、天正十九年一月末である。

佐竹・大掾両家は、先代同士が姻戚関係にあり、近年友好の度を加えていたこと故、清幹はこのような攻撃は夢想もしていなかった。

防戦僅か半日、清幹自刃して城は陥ちる。

大掾氏は常陸平氏の嫡流として鎌倉初期以来の名家、鹿島・行方両郡には、その支配下に十三館と称された諸豪族があった。

彼らが、府中城の攻略されたことを知って呆然とした時、佐竹家からの通達があった。

——清幹永年の虐政を匡す為、敢てこれを誅殺したが、大掾家はもとより縁浅からず、一族中より、然るべき者を選んで家督としたい。右相談の為、至急太田城に來集されし。

清幹の失政が民心を喪っていたことは疑うべくもない事実である。鹿島・畑田・玉造以下三十

三館の面々は、互いに連絡した上、多少の危惧の念を抱きながらも、打揃って太田城に來会した。二月九日正午である。

にこやかな微笑と鄭重な言葉に、一同がほっとして城内の大広間に坐を占めた時、突如、三方から鉄砲を射ち込まれた。

即死十五名。残る十八名は即座に降伏したが、ひきつれてきた僅かの従者と共に、悉く斬首された。

一名や二名の敵を欺き誘って謀殺するのは、戦国に於て珍らしい事ではない。しかし、三十三名の同時誘殺は未曾有のことである。

——酷烈無惨、人間の業とも覚えず、

と、主を喪った三十三館の遺臣たちが一斉に佐竹氏に対する反撃の旗幟を掲げたが、義重は時を移さず軍兵を送って、片端からこれを強襲させた。

地方の小豪族、所詮、佐竹の強大な軍力には敵う筈もない。半月足らずの中に、凡て或は討ち滅ぼされ、或は降伏してしまった。

だが、彼らの凄愴な戦いぶりは、土着豪族なるものの根強さを如実に示したものであり、なかなか、鹿島城主鹿島清秀の遺臣らの死闘は、佐竹方の猛将町田備前守の心胆を寒からしめたものであった。

鹿島城下一帯が、日本兵法の源流と云われる鹿島七流発生の地であり、七流の著名な剣士の大部分が、鹿島氏の家中であつたことを考えれば、これは当然であつたろう。

落城の前夜、重臣塚原彦四郎幹秀は、しきりに嫡子五左衛門昭親を探し求めた。

「昭親殿は水原へ物見に出ておられます」

と云う家士の答えに、下唇を噛んで首を振ったが、そのまま合戦評定の席に加わった。

暁方近く評定を終って再び昭親を探すと、多くの城兵に交って昏睡している。夜間の斥候に疲労し尽したのに違いない。

その寝顔を注視していた幹秀は、しばらく躊躇していたが、大きく吐息を洩らして己れも亦、暫時の仮眠をとる為に退いた。

何事か語ろうとしてあれほど昭親を探していた幹秀が、あえて昭親の眠りを破らなかつたのは、むろん、

——今宵限りの命だ、眠らせておこう、と云う親心よりも、

——眠り足らずば、明日の戦いに不覚をとろう、

と云う戦士としての顧慮からである。

戦いは、翌朝午前八時に始まった。

城兵はもとより死を決している。城門を押し開いて、遮二無二、佐竹軍に突入した。

「昭親、離れるな」

幹秀は槍をひっ提げて先頭に立つ。

敵兵を刺殺すること五人、槍の柄が折れると長剣を揮って更に三人を斃した。

全身返り血を浴びて阿修羅の形相である。

「城が、燃えているぞ」

と云う敵兵の叫びに、背後をふり向けば、丘陵の上の鹿島城が黒烟に包まれ、白茶けた焰がその間にめらめらと立ち上っている。

「昭親——もはや最期ぞ、昭親！」

と呼べば、

「父上、須賀へ——」

と直ちに応えたのは、かねてからの約束であろう。二人は、敵兵を斬り靡けつつ、重囲を突破して、城の北方一里弱（約三キロ）、須賀村に向って奔った。

須賀村の塚原には、幹秀父子の居館がある。しかし、二人が目指したのはその居館ではない。その館に近い梅光寺だ。

数刻の乱闘と疾走に、よろめきつつ山門をくぐった二人がどうと坐り込んだのは、高さ二尺（六〇センチ）程の、墓の前である。

苔むした墓石には、宝剣高珍居士、仁甫妙宥大姉と二つの戒名が刻まれている。これこそ、幹秀の養父、新當流の開祖ト伝塚原新右衛門高幹とその妻の墓なのだ。

死ぬ時は、師であり養父であるト伝の墓前でと、幹秀は常々心を決め、昭親にも云い含めておいたのである。

「かねての父上のお望み通り、ここで腹を切りましょう」

昭親がそう云った時、思いがけない答えがはね返ってきた。

「昭親、起て、一の太刀を伝授するぞ」

昭親の顔にぱつと悦びの色が漲った。幾たびか願って許されなかった新當流の極意一の太刀。唯授一人の秘伝として、宗家の生涯にただ一人にのみ伝授を許されるものである。

「昨夜、そちに伝えようと思うて探したが、物見に出たとか、機会を逸した。が、今ここに、先師昭覧の下に、伝授しよう」

双方、ト伝の墓に向つて、恭しく拝礼した上、血汐に塗れた刃を拭いて立つ。

幹秀は、一の太刀の極意を残すところなく説き、刃の型を示して訓えた。

「昭親、会得したか」

「しかと——」

「ならば、その一の太刀を、このわしを對手に試みてみよ」

一の太刀は云うまでもなく必殺の太刀である。昭親は愕然として父の顔を見返した。

「頭で会得したとて、実地に会得したとは云えぬ、わしを父と思うな、敵と思うて斬れ。わしも、むぎとは斬られぬ。同じく一の太刀をもって、そちを斬る」

らんらんと双眸を輝かしながらも、頬には微笑さえ浮べて、幹秀は云う。

——父を斬る！

昭親は、そのことの可能性を考える前に、そのことの非情さに、慄然とした。

「何を逡巡しておる。互いに自害を覚悟した身ではないか、斬るか斬られるか。そちの会得したと信ずる一の太刀を、わしの体得しておる一の太刀にぶつけて、まこと会得したか否か確か

めてみるのだ。ゆくぞ！」

幹秀の顔から微笑が消えた。

昭親も覚悟を決めた。

剣の道に志して十五年、畢生の念願としていた一の太刀を伝授されたが、それを実地に試みる機会は今眼前にいる父を相手とする以外にはない。

——父上も一の太刀、おれも一の太刀、敗れはせぬぞ。

猛然と血氣の闘志が湧き上った。

阿吽の呼吸を図ること数秒、凄絶の殺気さつと動いて、両者すらすると、一見驚くべき程無雑作に間合を詰めたと思われた刹那、二つの掛声が一つに響き、鏘然と刀身が鳴った。

次の瞬間、折れた二つの刃先が高く空に舞い、父と子とは、顔を見合せて頬を崩した。

双方とも左手に脇差を抜いて、相手の下腹に突きつけていたのである。

「出来したぞ、昭親、おれが一の太刀を知らなかったら、間違ひなく両断されていただろう」

「父上、私も一の太刀を会得していなかったら、間違ひなく両断されておりました」

幹秀は、満足そうに声を立てて笑った。

「お前が死ねば、一の太刀の秘伝はこの世から喪われる。何の為に伝授したのかな」

「永年の望みがなくなって死ぬのです。私は思い残すことはありません」

「ト伝殿が終生氣にかけておられたことは、鹿島家の将来と、新當流の道統のことじゃった。その鹿島家の滅びる日に、新當流の秘伝もこの世から消える。ト伝殿の死後、わずか廿年、申訳な

「次第じゃ」

と、墓石に向つて頭を垂れた幹秀が、

「昭親、どうやら、追手が探り当てて来たらしい。聞い疲れて雑兵の手にかかるよりは、互いの手で死のうぞ」

と、脇差をとり直した。

「あそこに、いるぞ」

対座する二人の姿を認めて馳せよつた佐竹の兵たちは、突然、一様に足を止め、半ば口を開いたまま、呼吸を止めた。

父と子との脇差は、それぞれ相手の鎧よろいの皮胴越しに心臓部を貫き、鋭く尖った切先を背中につき出していたのである。

=

永正八年四月、すなわち、鹿島城滅亡よりちょうど八十年前、同じこの鹿島城に、京の將軍足利義尹あしたのすけの使者が着到した。

来書に曰く、

——京八流の代表剣士と、名にし負う関東七流の代表者との試合を催したい。代表剣士を選抜して上洛じやうらくせしめよ。

関東七流とは鹿島七流のことである。当時他流がなかったから、鹿島の太刀の七派がそのまま